『氷魚』期の赤彦

宮川康雄

一

島木赤彦は大正四年三月『切火』出版の五年後、九年六月に第三歌集『氷魚』を上梓している。この五年の間に、彼は自己の歌風を樹立しただけでなく、写生派の機関誌『アララギ』を事実上主宰する立場に立ち、歌壇に確固たる地歩を占めるにいたった。本稿ではこの時期の赤彦の活動について考察してみたい。

『切火』の出版に際して赤彦は、みずから記した広告文で、「山に住して山に安ぜず、都会に住して都会に安ぜず、島に渡りて島に安ぜず、沈潜の悲界より念々分泌せる「切火」一巻は著者に取りては特に重要なる時期を劃せるものなり。」（アララギ会員宛書簡）と述べている。かくて新たな時期に踏み入るの自覚をもって出発点に立った彼が、まず計画したのは、土岐哀果・前田夕暮・北原白秋の三人の他流の歌人に、斎藤茂吉・古泉千樫・中村憲吉の『アララギ』同人を加えて『切火』の批評をしてもらうことであった。諸家の批評を聞いて今後の作歌への指針としようと考えたのである。「比較的色々の特徴を備へてゐると思ふもの」「中には非常に欠点のある歌であり乍ら、色々の問題が潜んでゐるらしい」ものなど、二十八首を選んで批評を乞うた。批評を受けるに際しては、相当の好評を期待していたのではなかったかと思われるが、結果は必ずしも芳しいものではなかった。茂吉もかなり手きびしい批評をしたけれども、赤彦が不満を感じたのは、哀果や夕暮が、自分の表現の意図を理解してくれないことに対してであった。哀果や夕暮は明治末年、新進歌人としてはなやかに文芸界に登場して世の注目をあつめており、赤彦もその影響を受けてきていた。その哀果や夕暮の批評に不満を感じたところに、新たな時期に入った赤彦の姿を看取ることができるように思われる。

『切火』を出版したとき、赤彦はすでに『アララギ』の編輯発行人を引受けていた。前年の四月に歌人として自立する目的をもって上京した彼は、編輯発行人の仕事を茂吉から引継ぐことになっていたが、中原ちつゑとの恋愛問題にかかわる事情があって延びていたのを、『切火』の出版を機としていよいよ本格的に取組むことにし、二月に引受けたのである。彼はこれまでしばしば遅刊・休刊をまぬがれなかった機関誌を順調に発行させることに全力を注ぎ、それとともに会計の整理にも努めた。短冊会を催して、その収入で欠損を埋めることを考え、茂吉・千樫・憲吉の三人と短冊会を計画した。日本画家で『アララギ』の同人でもあった平福百穂に絵を添え描きしてもらった短冊を頒布するというこの企画は、幸い成功を収めて、『アララギ』は、この年以後、休刊がなくなったのである。

大正五年一月号の『アララギ』の「編輯所便」で赤彦は次のように述べている。――「新年の御慶芽出度申納め候。「アララギ」も先輩諸氏の援助と会員一同努力の集中により玆に第九巻に踏み入り候

事嬉しく奉存候。九巻と云へば殆ど十年、此の間の辛酸を思へば、層畳の苦艱、今日只今も懼れ居り申さず。元気に充ち大手を振って新年を迎へ候事痛ましく嬉しく奉存候。心張って肉益々瘠す。瘠すと雖も病すること莫し。「アララギ」肥えし事一度も無之候へども病みたること一度も無し。痛ましく嬉しと言ふ所以に候。」そして、「今後の振否一に繋って会員一同の努力と我々編輯者の発憤にあり。銭と時と心と無駄費ひせず、精進の一途に立ち候覚悟、「アララギ」に於ては只之をのみ必要と致し候。放埒、放心、放思、放言の声「アララギ」の門に聞ゆるを容さず。況や流俗低卑の心をや。」当時の彼の日常は、「小生十数日来殆ど徹宵、心身聊か疲労を過ぎ候。早暁牛乳車の門外を過ぐる頃往往喪心せんとする事あり。」というていのものであり、しかも、「苦業足らざれば、之程の事に心弱くなる事無之にもあらず。家郷五十里、よい年をして遊子たり。嘲笑せらるるの理多くして、慰籍は自らも之に居らず。況や他人に之を求むるをや。」と記しているのである。なみなみならぬ作歌への決意をもっていたのを知ることができる。

大正五年に入ると、正岡子規以来の写生派の主張である写生主義と万葉集の尊重とを改めて強調し、ことに写生主義については、子規・左千夫・節のそれよりも一歩をすすめた自説を展開した。「写生の事、追々歌人の問題となり候事、小生らには遅すぎる心地致され候。」（大正五・二「編輯所便」）と述べているが、このころ、歌壇に「写生」をめぐる論議のおこってきていたことがここで自説を述べておく必要を感じさせたのであろう。彼は前年の十月百穂が第九回文展に「朝露」（六曲屏風一双）を出品、褒状を受け、宮内省買上げとなったときに、写真版として『アララギ』の十一月号に掲げ、中村不折らの批評を載せて、みずからは「編輯所便」で、「生等画に就て何等解する所なし。只「朝露」が少くも一昨年以来の苦心を経たる作なるを知るのみ。昨年の「鴨」及び「七面鳥」が亦斯の種の苦心を経たる作なるを知るのみ。画伯の庭広からず。地を劃し、囲むに金網を以てす。鴨と七面鳥と久しく此処に遊びたるを知るのみ。彼の如く複雑微細なる観察と写生が、如何にして此の如く単純なる材料と形態となりて現れたるかは、生等の深く考へざるべからざる所なるを知るのみ。我等の生活に於て然り。我等の歌に於て然り。」と記し、「我等はただ事象より深く澄み入らんとを冀ふ。益々深く澄み入らんことを希ふがゆゑに、益々深く事象の微動に触入せんとするなり。我等の写生斯の如きのみ。」と述べていた。百穂の絵画から示唆を受けるところのあったことが知られるが、こうして固めてきた自説を、次のごとく開陳したのである。

小生等は一草一木の微をも写生せんとす。箸の上下、気息の出入に至るまで、必要あれば之を写生せんとす。雲の去来、草木栄枯、鳥獣動止、人間行住、嘖嚏放尿の末に至るまで、凡そ吾人の歌材に入り来るもの、必ず之を写生するを努む。疎より微ならんを望み、至微至密、至深至妙の域に参して、只管吾人の歌材を写生せんことを冀へり。即ち写生せんことを冀ふと雖も、本願とするところは、外的条件の描出に非ずして、吾人の内的生命の集中せられたる活動に対し、至微至密至深至妙の表現を成さんとするに在り。

夫れ外物は一心より生る。我の一心なくて焉くに凡百の外物を認めん。一心の動きは、亦必ず何等事象の変化と運動とを意味す。事象の変化運動と合体せずして何に縁ってか吾人の一心を集中せん。事象の変化運動を伴はずして、一心を動かすといふこと絶対に之無ければなり。（下略）

此の意味に於て、吾人の写生と称するもの、外的事象の描写に非ずして、内的生命唯一真相の捕捉也。表現也。写生の要諦斯の如し。

写生の念とする所、已に、外的事象の描写に存せずして、内的生命の直接なる表現にありとすれば、写生の捉ふる所は、事象にして事象に非ず。事象なりと雖も、心と相触るる事象の中核のみ。

（「編輯便」大正五・三）

いまだ写生説として充分整備されるにいたっていないとはいえ、赤彦の写生論は、すでにこのなかにほぼその骨骼をあらわしているということができよう。写生をスケッチと同様に解するのではなく、「内的生命」の表現であるとし、その「内的生命」の表現がなぜ写実という方法をとるかについても言及しているのは注目すべきである。

万葉集を尊重する態度も、一段と強くなってきた。茂吉・千樫・憲吉らと大正三年に万葉集の短歌の輪講を始め、同年六月号以後の『アララギ』に連載していたが、加えて万葉会を興した。これは、長野県内の『アララギ』会員を対象に赤彦が万葉集を講義する会で、会員を啓蒙するとともに、万葉主義を鼓吹し、あわせてみずからの歌作に資するためのものであったろう。長期間継続して彼の啓蒙活動のなかで重要な位置を占めることになったこの会の起源については必ずしも明らかにされていないけれども、会員の希望に応じて興されたものとみるのは誤りである。赤彦自身が発案し、それを友人の両角喜重（雉夫）・森山藤一（汀川）などに話して、彼らの斡旋によって会員の希望に応じて開講するという形にしたのである。最初上諏訪町の小学校を会場として開講し、続いて諏訪郡の豊平小学校や長野市の小学校で講義を始めて、次第に各地に拡大していった。

折口信夫から五、六月ごろ早稲田大学の図書館に橘守部の遺著『万葉集檜嬬手』の原本が所蔵されているのを聞くと、赤彦は復刻して会員に頒布することも計画した。自分の考えを茂吉・憲吉らに話して賛同をえて着手したものの、全く経験のないことであり、仕事は遅延し、中途で会費を値上げしなければならなくなるなど、多くの困難が伴った。しかし障害を乗切って、年末、ついに『アララギ』臨時増刊号として同書を翻刻、上梓することができた。「我々は上は万葉集を祖とし、下は万葉集歌風の継承者、復興者を宗とすることに忌憚を感じない。往々にして古典派と云はれることにも、寸毫の恥辱を感じてゐない。万葉集若しくは万葉集歌風伝統者に対する研究書の中、未だ世に発表せられざる至宝が猶多く存することを知ってゐる。之等は力の及ぶ限り今後追々に世に発表するつもりである。」（大正五・一二）――これは同書の出版にあたって赤彦がその「編輯便」に記したことばである。この計画は後年「万葉集叢書」の刊行となって実現をみた。

万葉集への熱中も歌壇における万葉集研究の盛行と無縁ではなかった。大正五年には古歌集、とくに万葉集の研究がさかんに行われ、その成果が競って発表されていた。「潮音」では太田水穂君が、記紀の歌を詳説してゐる。「国民文学」では窪田空穂、松村英一、二君が古歌人や古歌集の研究をしてゐる。「水甕」では尾上柴舟、逸見義亮氏が古歌集の研究をしてゐる。「詩歌」では前田夕暮君が橘曙覧の評釈をしてゐる。「心の花」では佐々木博士が万葉集講義を連載してゐる。（中略）古歌の研究は万葉集を中心として、今年に至り甚だ盛んな勢である。「国民文学」では橘守部の「万葉集墨繩」を連載し、「アララギ」では、同著者の「万葉集檜嬬手」を公刊し

た。其の他佐々木博士の「万葉集講義」、釈迢空氏の「口訳万葉集」、小林花眠氏の「万薄集相聞集」豊田八千代氏の「万葉集新釈」等万葉に関する著書の刊行は高潮の姿である。歌壇万葉集渇仰の現象が例の雷同的気分の加味はあるとしても、我我には欣ぶべき現象とするを躊躇せぬ。万葉集伝統者の評釈も従って盛んであった。夫れ等の中で斎藤茂吉君の「短歌私鈔」は最も異色を放ってゐるものと信ずる。一般の歌風の今日に至って益々万葉を趁ふに傾いた事は争はれぬ事実である。」（「本年の歌壇に就て」大正五・一二）

こうして新たな立場を築いてきた赤彦の他流の歌人に対する態度は、大きく変化した。前田大正五年九月に歌集『深林』を刊行すると、赤彦はこれを批判して、「歌はんとする内容動機が、多くの場合決して重大な境地に立って居らぬに関らず、如何にも重大らしい厳粛らしい深遠らしい語句を陳列して一通りの外観を整へんとしてゐる」（「歌集「深林」の著者に呈す」大正五・一二）ことを指摘し、「斯様な心は、歌の作者が作歌其の物の動機を多く外的の事情に置いて、自己の内面を開拓し蓄積するの努力を忘れる時か、若くは自己の所有を反省する真実なる敬虔心を失ってゐる時にのみ生れる心である。仏者の所謂虚仮の心である。下世話に言ふ所のこけ威しである。芸術を低卑に就かしむる根源の心である。」と、きびしく非難している。そして「「深林」一篇のどの頁を繰っても其の例証は所在にころがってゐる。」として、具体的に作品を挙げて、「余り大袈裟な文句を竝べすぎるを弊とする。」とか、「元来前田氏は、予の眼よりすれば殆ど歌の調子といふものを解してゐない。」とかと評し、「粗雑」「神経は遅鈍」などと酷評している。二、三年前までの夕暮に対する態度と比べると、その変化の甚だしいのに驚かないわけにはいかない。

赤彦もしかし、他流の歌人のなかでも、北原白秋に対しては、好意を示していた。『深林』の批評においても、夕暮の

青麦を大きなる黒き素足にてふみにじりつつ材木はこぶ男

の作について、「「大きなる黒き素足にてふみにじり」迄は、作者の感動が麦を踏む足の動作に集中されてゐる。第五句に至って急に集中が攪散される。「材木はこぶ男」の位置が悪いのである。」と批評した際に、白秋の作を引いて、「白秋氏の大正三年作「地面と野菜」連作中

大きなる足が地面をふみつけ行く力あふるる人間の足が

ふと見付けて有難きかもさ緑の野菜のかげの大きな片足

等と対照すれば分る。」といい、「序でであるから此処に言ふ。白秋氏の同じ連作中に

地面より転げ出でたる玉キャベツいつくしきかも皆玉の如

といふのがある。前田氏の大正四年作中に

家鴨家鴨に押しかさなりつ地にまろび日光のなかに翅を鳴らす

といふのがある。白秋氏のは「転げ」が活きてゐる。前田氏のは「まろび」が戸迷ひしてゐる。」と批評している。

もっとも、赤彦が白秋に好意を寄せたのは、白秋の作品のすぐれていることを認めたためであると同時に、それ以上に、白秋の周囲にある芸術家らしい「さっぱりした空気」を高く評価していたからであった。白秋の芸術家らしい非妥協的な態度に彼は好感をもっていたのである。この二人がもし主義をひとしくし、同じ道をゆく歌人であったならば、二人の友好関係はこの後も長く続いたであろう。しかし赤彦は、白秋と自分とが本質において相容れないものをもっていることをはっきりと自覚していた。妥協を嫌う彼らが袂を分かつのも、そう遠い日のことではなかった。

二

赤彦が身体の異常に気づいたのは、この大正五年の八月の末のことであった。左の睾丸に腫物が生じているのを見つけて、大学病院にでかけて受診すると、結核性副睾丸炎とのことで、入院、手術を受けることになった。病気の経過については、土田耕平に宛てた次の書簡によっておよそ推測することができる。「九月五日左丸全部を切り取り数日仰臥のまゝ居り候処比両三日大に軽快もう数日にて学校へ出るべく候間御安心被下度候始末よき処へ集りし故最も確実に除去し得たるを歓び候医師も保証してくれ自分も保証するから大丈夫に候小生平常元気よき故病毒体内に居る能はずして末端に蟄居せしと見え候小生益々元気にて仕事すべく候間御安心被下度候」（大正五・九・一四）

睾丸を切除した者のことばとしては意外に平気な叙述をしているように思われないでもないが、これは恢復の見通しがはっきりついてから認めたものであるからであろう。睾丸を切除しなければならないという診断を受けたとき、彼が事態をそう冷静に受けとめえたとは思われない。

外を見れば見ゆる朝顔のつぶら実に冬の日あたり忽ちかげる
動くことなかれと言ひし我が茂吉わが床のへにものを食ひ居り
必ずに癒ゆべき病と思ひつつ腕疲れて物を書き居り
冬の日のあたることなき北の窓一つの窓に一日向ふ
睾丸を切りおとしたる次ぐの日の暁どきに眼ざめ我が居り
寂しくて布団の上ゆ仰ぎ見る短日の陽は傾きにけり

（病牀一）

病気はけれども順調に恢復に向かって、耕平に宛ててさきの手紙をかいた九月の中旬には彼はほぼ日常生活を営むには差支えない程度にまで良くなっていたらしい。しばらく欠勤を続けていた淑徳高等女学校にも出勤した。

赤彦はしかし、十一月二日以降、ふたたび病床の人となった。妻子と別れて東京に独り住いの生活を長く過ごす間に遊里で感染した性病の症状があらわれてきたのである。性病は当時治療のむずかしい病気であり、医者の茂吉から薬をもらってひそかに治療につとめていたものの、効果が容易にあがらなかった。一時恢復するかにみえたが、十二月初旬になるとまたぶり返した。長びく病気に彼は暗澹たる心境に陥った。

短か日の眠りよさめていたづきの病の床に白湯を飲み居り
硝子窓の外の面くれなゐの南天に雀動きて冬の日かげる
たまたまに来つる人らは我が病快からむと言ひ皆かへりたり
一人して病の床に横はる日かず思へば冬至に近し

（病牀三）

茂吉に与ふ

冬の日の障子の下に眠りて覚め幽かなるかも寝ぬらく我は
たまの緒の命をつなぐ日々のもの薄粥飯も飽きぬるものを
日はささず十二月となりし窓の下からだ疲れて眠ること多し
わが友の処方の薬口にふくみ直に寂しき冬日は傾く
歳末の宿人皆国にかへりたり寂しと言ひぬ君に向ひて

病気がようやく治癒をみたのは、年が明けてからのことであっ

た。百穂に宛てて、「小生数日前より尿の模様全く平常に復し昨日斎藤君より見て頂きもはや万事解禁致され候間御安心願上候」（大正六・一・一〇）と、恢復のよろこびをかき送っている。

ところが、三月、睾丸にまた腫瘤が生じているのに彼は気づいた。「当分如何なる人にも秘密の事」（大正六・三・一九　藤森省吾宛書簡）と記しているが、左の睾丸は、さきの手術で摘出しているので、今度は右側に生じたものであろう。この腫瘤を彼がどのように処置したかは明らかではないけれども、同じ書簡に、「小生今は絶対を要して寝て居り候」とあることなどからすると、おそらく左側と同様に手術で切除したものであろうと推測される。

半年余にわたる病床生活過ごすとともに、赤彦は、このようにしてこの間に男子としての機能を失ったのであった。このことが、彼の心に大きな負い目となってのこったであろうことは、容易に推察のつくことであろう。彼はしかし、それを負い目として強く意識すると、むしろ、逆に、生に対して積極的な姿勢をとるようになったのではないであろうか。彼が作歌を仏道の修行と同じように考えてこのころから後年になるにしたがって歌道の求道者のごとき色彩を強めていくのは、右の事情と深くかかわるところがあるものと考えるのである。

六年五月、赤彦は東京市外高田村雑司ヶ谷の亀原に借家をし、郷里から妻子を呼び寄せて一家を構えた。これは、前年来の病気の体験から、東京で長く暮らしていくには生活の基盤を整えることが必要であることを痛感したためであったろう。『アララギ』の会員に宛てた三月十四日付の書簡に、「此度は家族引まとめ東京に一家を構へ申度試験休中にやってしまひ申度と存じ候小生も色々にて健康すぐれず一意専心小生の仕事を励み申すべく命あるうちに仕事して置き度存じ居り候」（大正六・三・一四　唐沢うし子宛書簡）とあって、一家を構えた気持と、家族を呼ぶことがすでに三月中旬には決定していたことが知られる。

赤彦の場合、東京に妻子を呼び寄せるについては相当むずかしい事情があったといわなければならない。諏訪の家では養父の政信が農業を営み、赤彦の妻の不二子や子供たちが手助けしていたから、もし赤彦の家族が上京してしまうと人手が不足した。政信の妻のぬゐは中風で身体が不自由であった。その上、赤彦は、東筑摩郡の広丘小学校の校長をしていたときに、部下の教員中原ゑつゑと恋愛関係をもったが、この関係は長く続き、彼の上京に際しては、ゆくゆく何らかの形で二人の仲を世間に公認してもらおうとの約束を交していたらしい。妻子を東京に呼ぶことは、その約束の実行をいっそうむずかしくするおそれがあった。こうした障害があったにもかかわらず、彼が家事の手伝いのためには長男と次女・三男を郷里にのこすことにし、妻とともに次男・三女・四男を呼び寄せて東京に家をもったのは、歌人として立とうとして上京した初志を貫ぬこうとしたためであった。彼の固い決意をそこにみることができる。

（亀原の家）

妻子らの今日かも来ると五月雨のあめの衢（ちまた）をわが歩み居り
五月雨の雨に霑れ来ていそがしくこの停車場に汗をふき居り
硝子戸に流るる雨を眺めゐる我の心は人待ちがたし
心しきりに家もつことを危みつつ日ねもす妻を待ちくらし居り
父ははの年老いています山の家を離れて遠く歎き来らむ
五月雨に濡れてつきたる妻子らの面わを見るも日ぐれの室（へや）に
はるばるに家さかり来て寂しきか子どもは坐（すわ）る畳の上に

父と母そろひて子らの前に居り思ひて見れば四年ぶりならむ
うつり来て未だ解かざる荷の前に夕飯たべぬ子どもと竝びて
わが病癒えずと知らば歎くべみ夜ふけて妻に告げにけるかも

身寄りもいないに等しい大都会に家をもち、新しい生活をはじめようとする者の緊張が感じられる。藤沢古実が同居して編輯の仕事と家事とを助けることになった。

この二か月後の七月、赤彦は長野県の小学校の教員の組織である信濃教育会の機関誌『信濃教育』の編輯主任に就任している。東京に家をもったのが『アララギ』の経営と作歌に専念する覚悟をもって実行したものであることを思うと、この行為は、解しがたいことのように思われないではない。しかし、妻子を東京に呼んだからには生計の維持についてはこれまで以上の配慮を要求されていたし、郷里との連絡もより密接にする必要があった。そのためにはこれまでどおりに淑徳高女の非常勤講師を続けるよりも、この編輯主任の職についた方が都合がよいと考えられたのである。仕事の大半は東京で済ましし、教育会の事務局のある長野市にでかけるのは月に一度でよいとの約束もとりつけていた。しかも、出京前長野県で小学校の教員、郡視学等を勤めた赤彦は、同県の教育界には強い愛着をもつとともに、教育についてもいうべき多くの意見をもっていた。だからこそ信濃教育会でも機関誌の編輯主任への就任を強く要望したのである。県内の『アララギ』の会員には教員が多かったので、編輯主任となることは、『信濃教育』を通じて彼らとの交流を密にし、さらには写生派の勢力を拡大扶植することにも役立つはずであった。就任を承諾したのにはこうした考慮も働いたであろう。彼はあるいは、さきに妻子を東京に呼ぶことをきめる以前に、就任の要請を受けており、呼び寄せることをきめたときには、その要請を受諾するつもりでいたのかも知れない。

編輯主任として、のこした仕事が言論活動を中心とするものとなったことは言うまでもないとして、在任中殆ど毎号欠かさず巻頭に論説を掲げているのをみても、この仕事に注いだ情熱のほどがうかがわれる。目につく論説の題名を挙げてみると、「高等学校」(九月)「長野県より何を出したるか」(十月)「鍛錬せられざる心」(大正七年一月)「容さざる心」(同年五月)「師範教育」(同年七月)「再び師範教育を論ず」(同年八月)「教育者の種類」(同年十一月)「青年教育」(同年十二月)「鍛錬と徹底」(大正八年一月)「速成者速変者」(同年五月)「少数者」(同年六月)「中等学校訓練」(同年十二月)「訓育問題」(大正九年一月)などである。論説中に子規の言行にしばしば言及しているのは、子規に対する尊敬の念の篤かったためであると同時に、文芸と教育とに共通するもののあることを認めていたからであった。

編輯主任に就任以後、東京・長野間を毎月往復し、諏訪の家にも寄ることが多くなって、日常はにわかにあわただしさを増した。しかも、三人の兄が早くに歿していたため、赤彦は生家の家事をもみねばならなくなっていた。編輯主任に就任した翌月の八月に遠く北海道に渡っており、この渡道が何のためであったか、伝記上の疑問の一つとされているが、これも末弟の瑞穂にかかわる用事のためであった。彼は渡道すると、瑞穂が世話になってきた余市の親戚三溝家に挨拶をし、伯母三溝たかの展墓をした。そのあと、小樽で瑞穂に会って用を済ませた。彼は渡道を機会としてオホーツク海の岸辺まで行ってみるつもりであったが、時日のゆとりがなくなり、予定を変更、根室本線で狩勝峠を越えると新得駅から引返して帰京した。

大正六年における赤彦の文芸活動について簡単に触れておくと、五月に太田水穂と応酬し、また六月から十月にかけて三井甲之と歌の用語をめぐって論争するなどのことがあった。が、ここに記しておきたいのは、評論と創作方面における活動である。『アララギ』三月号に掲載した「万葉集古今集小唄」で彼は、万葉集の伝統は平安時代に入ると、勅撰集の古今集にではなく、神楽歌、催馬楽の一部及び風俗歌などの民謡に受継がれているとし、「我々は、万葉集へ向けた眼を、古今集以下の撰集へ転ずる事なしに、そのまま直ちに之等の民謡を見詰むる方が、寧ろ万葉集の正系を辿るものであるかも知れない。万葉集と共に古今集その他の撰集あるに非ずして、万葉集と共に神楽歌、催馬楽の一部及び風俗歌等があるのである。」と述べている。この万葉集の系統についての論は、彼の持論となったもので、同じ号に載せた「阜上偶語」の「隆達の小唄」でも、同様な立場から、文禄から慶長年間にかけて活躍した隆達の小唄について、次のように論じている。「予は小唄に於ては隆達期のものを好む。隆達に引続いたと思はれる弄斎節以下のものになると、詞の弄びになる。万葉集に引続いた古今集が外形的なものに堕落したのと多少似て居る所がある。古今集は万葉集から百余年を経てゐるが、弄斎節は隆達に直ぐ引続いてゐながら、変化の跡甚だ著しいのは、小唄の流行が小唄を浮気にしたのかも知れない。歌が官府の保護を受けるやうになって、古今集が先づ外形的に堕落したのと、意義相通じて考へられないこともない。小唄は多く人情を取扱ってゐる。短歌で言へば相聞の唄である。恋に向って真面目に突き当って内心の苦痛を訴へてゐるのは万葉集である。恋を手先の器用で扱って物言はぬ人形にしたのは古今集以下の撰集である。弄斎以下は古今集と同じ意味で人形いぢりをしてゐる。夫れに比すると、隆達及び隆達期と見らるべき本手組端手組等の小唄は、古来民謡の命に根ざして、生き生きした人情に正面から突き当ってゐる所がある。これを以て直ちに万葉集に比べるのは早計かも知れぬが、予は万葉集の伝統は寧ろ平安朝以後の民謡を経て、その一部が隆達期の小唄等に顔を出してゐるものといふ解釈を持ってゐる。」

このような解釈は、当時手をつけはじめていた民謡の蒐集と研究、また小曲の制作と関連するところがあるであろう。同時に、柿本人麿の偉大さに畏敬の念を抱きながらも、むしろ、東歌にみられる民衆の真情に強く惹かれていた赤彦らしい解釈を示したものとして留目されるのである。

作品の上では、前年の『アララギ』九月号の「雛燕」あたりから認められるようになっていた堅くひき締った調子の歌が次々と発表された。病中詠「亀原の家」や「栂と松」「岩手以北」「北海道」などである。赤彦の歌風樹立の時期をどの辺とみるかを断定的に述べるのは容易なことではないけれども、それをこの辺とする説も認めてよいのではないかと思うのである。

小夜ふけて青葉の空の雨もよひ光り乏しく月傾きぬ
月くもる青葉の道は寂しきか唄をうたひて通る人あり　（亀原の家）

通り風すぎて木擦れの音すなり枝々ふかく交はせる赤松
赤埴の土は明るしひとり居る我が眼に見えて松葉は散るも　（栂と松）

川上に来りておそきわが汽車の吐く湯気かかる川原の石に
温泉に入りて一夜ねむりぬ陸奥の山の下なる入海の音　（岩手以北）

雨曇り暗くなりたる森の中に蜩鳴けば日暮かと思ふ　（北海道）
笹原の曇りにつづく大海を遠しとも思ふ近しとも思ふ
おほ伯母の墓は磯べの笹の原海より風の吹く音やまず　（落葉松）
落葉松の色づくおそし浅間山すでに真白く雪降る見れば

三

大正六年を通じて『アララギ』は拡大を続けた。赤彦は、一月号の「編輯所便」に「同行者は、只今台湾朝鮮満州より北海道に亙り、猶海外にまで及び居り候。」と誇ったのであったが、会員の増加はその後も衰えることなく続いた。多分十一月の末であろう、赤彦ら編輯同人は、茂吉の宅に会合をもって、翌七年の編輯計画をたてた。十二月号の「編輯所便」をみると、新年以降連載をはじめるものとして彼は、「茂吉の随筆、千樫の随縁鈔、文明の短歌入門、迢空の万葉集私論及び歌論、小生の随筆」等を挙げて、ついで、「岡麓氏も何か書いて下さる筈に候。万葉集輪講も今少し向きをかへて精緻に致し度きやう打合せ致し候へば多少面目を改め候事と存じ候。中村憲吉は何分遠隔にて直接打合せ不便に候へども新年号より必ず筆を揮ひ申すべく候。平瀬泣崖同様に候。」と記し、さらに次のように述べている。「あいぬ語研究の唯一権威者として知られたる金田一京助氏は本誌のため毎号あいぬ古謡御執筆下さるべく決定致し候。新年号より本誌附録として現れ申すべく、文芸及び学界の至宝と信じ申候。露国人ねふすきい氏は日本古典研究のため来朝せられ候処、今回本誌のため露国古謡を飜訳して下さる事に相願ひ候。（中略）小宮豊隆氏は露国そろぐぶ氏の訳詩を寄送下さるべく御承諾下され候。森田恒友氏は新年号のため長篇画論を賜るべく画界空谷の跫音と存じ候。茅野蕭々氏は追って本誌のためでえめる訳詩御寄送下さるべく候。其の他阿部次郎氏のげーて詩抄、石原純氏の論文、羽生永明氏の平賀元義伝、正宗敦夫氏の万葉集丁数索引等すべて新年号より引つづき御願申上ぐべく、同人及び会員諸君の奮励と共に、本誌が如何なる活動を呈すべきかを想見し愉快に存じ候。」

こうして大正七年に入るといっそう会員の増加をみたが、同時に、『アララギ』が強盛に向うにつれておこってきていた他派との摩擦が一段と強まった。

他派の批判は写生派の作歌理論である「写生」の説に対して集中された。「大正七年に於て吾等の万葉尊信と写生主義とに対して方方から色々な非難が発せられた。「珊瑚礁」では写生をスケッチと殆ど同義に解して、性命を盛る芸術を写生主義の名で唱へるのは我儘であると言うた。吾々が我儘ならば古来東洋の写生論は大抵我儘である。吾々の写生は性命を盛るを正当とし必要とする。正当なる必要は正当なる権利であり、権威である。我儘ではない。「国民文学」では写生を以て啓蒙運動なりと言うた。単に啓蒙運動なりとする写生は吾々の写生全部ではない。初歩の一部である。若くは附帯の一部である。初歩の一部、附帯の一部と全部との相違は、殆ど全体の相違である。三井甲之氏は「万葉だとか写生だとかいって、凝り固まってしまへば、思想も生活も空洞貴族主義に固定してしまって云々」といって、吾々の万葉尊信や写生主義を貴族的であると言うてゐる。これは衆説中殊に珍妙な説である。（中略）尾山篤二郎氏は「アララギ」を事大主義だと言うた。之は愛嬌以上の愛嬌である。氏には第一事大主義とは何んな意義であるか恐らく解って居る

まい。事大主義とは一種の便利主義、功利主義である。それを「アララギ」に何う当て嵌めるつもりであるか分らぬが、夫れを氏から聞かうとする興味が出て来ないのである。」

（「大正七年のアララギ」　大正八・一）

赤彦は、他派の批判に対してはこのように強気な態度をもって応じている。茂吉は前年の末に長崎医学専門学校教授となって長崎に赴任しており、歌壇から遠ざかる形になっていたし、憲吉は前々年のうちに郷里広島県の布野村に帰住していた。土屋文明も諏訪高等女学校の教師となり、長野県に就職していた。千樫は頼りになる人ではなかった。赤彦の右にみるような強い態度は、機関紙の編輯発行人として『アララギ』を守らねばならぬ責任感からもくるものであったろう。この応酬については、北住敏夫氏の『写生説の研究』や、篠弘氏の『近代短歌論争』など他に研究したものがでているのでここでは詳述しない。他派の論客のなかでは、六年三月に創刊された『珊瑚礁』に拠った中山雅吉が客観描写を重んじて主観の発露を軽んずるかにみえる『アララギ』の弱点を鋭くついて耳を傾けるべき論を展開した。しかし八年三月『珊瑚礁』が休刊するに及んで雅吉の活動も休止し、論争が充分な稔りをもたらさぬままに中途でおわってしまったのは惜しまれる。

前年の十二月十八日、長男政彦を十八歳の若さで亡くしたのに続いて、この年赤彦は、多くの不幸に遭遇している。一月下旬、実父塚原浅茅の病気の報を受けた。帰郷病床を見舞ったが、父はついに恢復せず、彼がふたたび見舞ったあと、七月十八日に七十五歳で歿した。『アララギ』の古くからの仲間、湯本禿山が、同じ日に歿している。禿山は赤彦が養鶏の仕事に失敗、家族の生計を維持するために教職への復帰を強く望んでいたときに、広丘小学校の校長の職を世話してくれた恩人であった。続く十九日に篠原志都児が亡くなった。同時期に左千夫に就き、豊平村の隣村北山村の人であった関係もあって、とくに親しくしてきた歌人である。かぞえ年三十八歳の若さで、老母と妻と二人の幼児をあとにのこして歿したのであった。

このころ、久保田家では政信の妻のぬゐの衰弱が目立つようになってきていた。農業に従っている政信も六十五歳の老年で、農業を続けてゆけるのも、そう長い間のこととは思えなかった。政信から家の事情を考慮してくれるよう要望を受けると、赤彦はなお東京に住み続けたい希望をもちながらも、養父の要望を受け入れないわけにはいかなかった。五月に雑司ヶ谷から転居してからしばらく住んだだけの関口町の家を彼は引払い妻子を帰郷させることにした。自分も帰郷して生活の本拠を諏訪におき、『アララギ』の編輯その他の仕事は、毎月半月ずつ上京して処理することにした。かつて同居していた藤沢古実を発行所におき、留守の間の事務を処理させることにきめ、七月下旬に子供を帰郷させ、続いて妻と自分も諏訪に帰った。八月以降麹町区下六番町の佐々木方に部屋を借りて、発行所をそこに移すことができた。

他派からの執拗な攻撃、子供と実父の死、親しい人びとの相継ぐ訃音、生活環境の変化などのために心身を休めるいとまをもちえなかった赤彦であるが、しかし彼はこのために屈してしまうことはなかった。攻撃に対しては反撃を加え、悲しみに堪え、困難な問題に遭遇してもよくこれを処理しおえた。赤彦はいかなることに出合おうと動じないようにおのれを鍛えあげたいと念じ、努めていた。彼は自分を「鍛錬」することによってすぐれた作品をつくることができるようになることを信じていたのである。たとえば、最愛の政彦

の突然の死に遭い、多忙と悲しみのために『信濃教育』に掲載すべき論説の稿が遅延してしまったときでさえも彼は、稿を草しえなかったのは、自分に「鍛錬」が足りないためであるとして、次のように述べている。「予の歌は平常冴えたる情と、鍛へられたる力とを目指してゐる。目指す所斯の如くして予の情の甘たるき事斯の如く、予の力の鍛へられざる斯の如しである。予の歌の到る所浅きはここに職由する。」（「鍛錬せられざる心」大正七・一）

赤彦は理想主義者であった。自己の理想のために一身を捧げて悔いなかった。彼はその理想を他に対しても自分と同様にもつことを求めた。「大凡人他を重ずれば之に求むる所自ら高し。求むる所高ければ容す所弥々狭し。容す所狭きは求むる所高きが故なり。求むる所高きは其の物を重しとする故なり。此の故に人珠玉に細瑾を容さずして瓦石の潰敗を意とせず。物を容す衆きは物を重ずるの薄きなり。物を容るるの狭きは物を重ずるの深きなり。」（「容さざる心」大正七・五）このようにしてリゴリズムがおのずから形成された。歌境はこのために狭くなっていったが、しかし、深まり、赤彦はこの年多くの秀作を生みだすことができたのである。

雪の上を流るる霧や低からし天には満ちて光る星見ゆ
おのが子の戒名もちて雪ふかき信濃の山の寺に来にけり
昼明かき街のもなかに雪を捲くつむじの風は立ち行きにけり
（善光寺）

ひたぶるに我を見たまふみ顔より涎を垂らし給ふ尊さ
雪のこる高山すその村に来て畑道行く父に逢はむため
古田のくぬぎが岡の下庵にふたたびも見む父ならなくに
（わが父）

間なく郭公鳥のなくなべに我はまどろむ老父の辺に
くれなゐに楓芽をふく窓のうちに父と我が居るはただ一と日のみ
日のくれの床のうへより呼びかへし我を惜しめり父の心は
（高木の家）

庭のうへの二つところに掃きあつめし胡桃の花はいくらもあらず
大き炉に我が焚きつけし火は燃えてものの音せぬ昼のさびしさ
この家に帰り来らむと思ひけり胡桃の花を庭に掃きつつ
（飯山町）

石の上に桜の落葉うづたかし正受老人ねむりています
あわただしき心をもてりおくつきの桜落葉踏む我の足音

大正八年一月号の『アララギ』で、赤彦は改めて写生主義と万葉集に対する自分の態度を次のように宣明し、心を新たにして作歌に精進すべく決意している。――「『アララギ』は歌に於て一途に万葉集を尊信する。『アララギ』は歌を作るに写生を念としてゐる。之は由来已に久しい。『アララギ』の万葉集を尊信することと、写生を念とする事は議論ではない。信念である。その信念はお題目を唱へて納まりかへってゐるやうなのんきな信念ではない。作歌道に於ける吾々の一動に徹し、一止に徹し、居常行住、念々透徹せんことを冀ふ信念である。」（「大正七年のアララギ」）しかし、この八年になっても他派の批判はやむことがなく、彼はそれに応接することを余儀なくされた。

批判は今や必ずしも歌論や作品の上のことにはとどまらなかった。ここに取りあげておきたいものに、伊藤左千夫の墓碑に関する

ことがある。大正二年七月左千夫が急逝してから伊藤家は家運が傾き、墓碑も建たないままになっていたのを門弟の責任であるとして他派の歌人から非難を受けたのである。この非難はそう当をえたものであるとはいえないけれども、当時の、ことに歌人の社会では他派への攻撃として充分にききめのあるものであった。

この非難をはじめに耳にしたのは百穂で、憤って彼が墓碑を独力で建立しようとしたのを赤彦はとどめ、そのことを『アララギ』の事業とすることを提案した。四月十五日に茂吉の宅に編集同人の会をひらいて賛同をえ、七月三十日の左千夫七回忌の記念事業として、あわせて、『アララギ』七月号を左千夫記念号として発行すること、秋までに左千夫の歌集を出版することをきめた。歌集の出版は遅れたけれども、記念号の発行の仕事は、赤彦の努力によって編輯をおえ、七月、「伊藤左千夫号」として発行することができた。左千夫の知友、門弟の寄稿に左千夫の書簡を加えて『アララギ』空前の大冊となり、しかもなお収容し切れない原稿がのこったので、十月、続いて「第二左千夫号」を発行した。建碑のこともほぼ計画どおりに進み、七月下旬に碑を建立、そして左千夫の忌日には除幕式を挙げることができた。

他派との関係に関してもう一つ挙げておきたいものに、この年十月、慶応義塾の図書館で与謝野鉄幹と並んで行った講演のことがある。この講演会は義塾の学生の同好会組織三田短歌会のひらいたもので、世の注目をあつめるほどのものではなかったが、しかし、いうまでもなく鉄幹は明星派の統帥として子規の在世中、子規と不可並称を唱えられた歌人であり、子規門流の『アララギ』との対立は、子規の歿後もなお続いていた。その鉄幹と並んで『アララギ』の責任者である赤彦が講師をつとめることになったのであるから、赤彦にとって、また『アララギ』にとって、このことが小さな事件であるはずがなかった。赤彦はこの講演会で鉄幹のあとに登壇、「万葉集の系統」についての自説を気魄に満ちた態度をもって説き、鉄幹を圧倒したと伝えられている。

左千夫の七回忌の記念事業と義塾における講演と、これら二つのことは、他派の非難、もしくは他からの依頼に応じて行ったもので、契機となったのは、他からの働きかけであった。赤彦のこれに対する態度は、しかし、きわめて積極的であった。彼は左千夫の記念事業を行うことを提案し、記念号の編輯に当っただけでなく、岡麓と平福百穂とが主として担当することになった建碑の仕事にも参与して、仕事が順調に進むよう配慮を怠らなかった。慶応義塾図書館における講演の依頼を受けたときにも、よろこんで応じたものと思われる。

この結果、『アララギ』の結社としての結束が強化されることになった。『アララギ』の会員といっても多様であり、近年になって入会した者の方が多く、入会はしたものの、自派の立場を充分に自覚している者のみとはいえなかった。その彼らも記念事業が行われ、募金に応ずることによって会員としての自覚を深めた。機関誌の編輯発行人としてつねに『アララギ』の中心にいる赤彦の存在が重いものになってきたのは、当然のなりゆきである。彼は慶応義塾の講演会においては『アララギ』の宿敵ともいうべき鉄幹を向うにまわして結社を代表する立場で講演を行い鉄幹を圧倒して在京の若い歌人たちの信頼感をかちえたし、これまで彼の指導してきた地方の青年たちも、このころにはようやく歌人として成長し、強い支持勢力を形成してきていた。赤彦がやがて『アララギ』を独裁する準備体制が整ってきていたのである。

この年は、左千夫の記念事業のほかに、長く病床にあった養母のぬゐが五月に六十六歳で歿するなど、身辺も多事であった。赤彦は、年初作歌と万葉集の研究とに精進する決意を固めながら、あわただしく一年がおわろうとしていることを思って、年末が近づくと、強い反省の念にかられた。「斎藤石原中村土屋等皆東京に居らず小生は東京長野諏訪三ヶ所を毎月廻り居りてアララギに専門になられず千樫は小生よりも多くなまけ候有様此処にて少し考へて出直さねばならぬと思ひ居り候」（大正八・一二・一六　池崎忠孝宛書簡）と書いている。編輯を茂吉から引継いだころ四百部足らずしか印刷していなかった『アララギ』は、この八年の四月には千二百部を発行するまでになっていた。会員が増加するにつれて『信濃教育』の編輯主任の仕事が重荷になってきたので、辞職することを考えたが、この仕事をやめれば生計をいかにして立てるかという問題があった。朝日新聞社からは翌九年の一月から『東京朝日新聞』の短歌欄の選歌を担当してほしいとの依頼を受けていたけれども、それによってえられる収入の額は知れたものであった。この問題は、しかし、幸いなことに、思わぬ援助の申入れがあって解決できることになった。百穂から赤彦の万葉集の研究を助けるために経済上の助力をしたいとの申し出を受けたのであった。百穂からは大正初年の『アララギ』の会計整理に際して援助を受けて以来個人的にもたびたび経済的な助力をえてきていたので心苦しい限りであったけれども、赤彦は、熟慮の末に、このたびもその好意にすがることにした。「今回小生に関する問題は非常の大事なるを思ひ恐懼の念に不堪存じ候一方御厚志に対し何処迄も素直なる念を以て徹せざるべからず之れ御高志に対する小生唯一の道なりと存じ候色々考へ候末四年五年と申し候ては非常の事に有之小生の責任愈々重きを感じ候につき向一年間御厚志に浴し仕事進捗の模様とその成績を見申度小生に追々自信つき候様ならば更に又御配慮相煩し申度と存じ候」（大正八・一二・一九　平福百穂宛書簡）とかき送っている。

こうして生計の維持に見通しをつけえた赤彦は、作歌と万葉集の研究とに全力を注ごうとする。彼の目は外部に向くよりは内部に注がれ、自己の内面の充実をひたすらに求めるようになっていく。九年一月号の「編輯所便」では、「我等現今の歌壇に対して、我は顔するに及ばず、尊敬心を捧ぐるにも及ばず、不足言ふにも当らず、不足言ふひまに自分を成長させて居ればよき事に候。自己成長の工夫疎かなる時放言多く冗弁賑ひ申すべく候。左様な中に歌壇先輩少数者を尊敬し得る我等を幸福と感じ居り候。小生等尊敬の向ふ所は広からざを患ひず深からざるを患ひ候。（中略）恋人は一人にて足る。アララギの尊敬する対象は少数にて宜しく候。」と述べ、同じ号の「大正八年のアララギ」でも、『アララギ』の新人に向かって、次のように説いている。「「アララギ」の新しき人々は、総体に今年に入って各々自分の特性に目覚め出した観がある。先人の未だ行かない境に行くといふことは、只一心に自分の土を穿ってゐればいいのである。そこから本当の自分のものが掘り出されれば夫れが自から特性を帯びたものになるのである。特殊性といふ事は此の意味を外にしては存在せぬことである。」

赤彦が『氷魚』の編輯に着手したのは、この大正八年の末か九年のはじめの頃のことであった。「小生の歌集「氷魚」も近々出版のつもりに候」と歌集出版の意志のあることを表明したのは、八年十二月号の「編輯所便」であり、「小生の歌集「氷魚」只今歌稿整理中に有之三四月頃出版相成申すべく候」と出版を予告したのは、九

年二月号の「編輯所便」においてであった。編輯に着手したのは、もと大正六年頃に出版を計画しながら延引してきていたのを、「斎藤茂吉氏からは昨年来屢々本書刊行を促されてゐる。」（『氷魚』巻末記）と述べているように、茂吉から督励を受けたためもあったらしいが、それよりも重要なのは、彼がこのとき上述のごとき状態にいた、ということであろう。『切火』を発行してから満四年を過ぎて、作歌と万葉集の研究に専心したがうべく決意を新たにしていた彼が、ここで出版の延引してきていた歌集を上梓し、一区切りつけようとしたとしても、それはごく自然な心の動きであったといえるであろう。大正九年には年齢もかぞえ年四十五歳を迎えていた。彼はこのころ、自分の歌風が変化していることをも自覚し、藤沢古実に向かって、「僕の歌は最近に変化してゐる夫れを少しも君が気付かないのに驚く云々」（大正九・一・一四）といって注意を促している。『アララギ』の責任者である赤彦の歌集の刊行は、むろん、『アララギ』の歌壇における地位を安定的な、より確実なものにするためにも要請されていたことであった。このようにして赤彦は九年六月、『氷魚』を刊行したのである。刊行に先立って三月、彼は、予定のとおりに『信濃教育』の編輯主任の職を辞任し、生活を一元化して今後の活動のための体制を整えている。これ以後の赤彦は、『信濃教育』の七月号に教育について、「教育道を徹底させるには教育道に立籠らねばならない。画工が絵画道に立籠り、音楽家が音楽道に立籠り、科学者が科学道に立籠ると同じである。画家の哲学は画家の全生活を基調として成立し、科学者の持する哲学は科学者の全生活を基調として成立すると同じく、教育者各自の哲学は教育者各自の全生活を基調として成立すべきである。」（「東西記」）と説いているように、歌壇に対しては籠城主義的な態度を次第に強めることになる。この彼の前にいかなる道がひらけるか、そのことについては稿を改めて述べなければならない。